

第2回 生活環境懇話会 (日本熱物性学会研究会) 報告

ホカナサナ： 諸岡晴美 (富山大)、吉田篤正 (大阪府大)、山田 純 (芝浦工大)、
薩本弥生 (横浜国大)、井上真理 (神戸大)

本研究会は、身の回りの多様な現象と身近なモノの性質についての話題を中心に、異分野の研究者・技術者が広い視野に立ち、新しい研究の萌芽を見出すこと、新しい研究仲間を見出すこと等を目的として発足しました。今回は9月8日に、前回と同じ京都大学工学部で開催されました。あいにく、雨の降りそうな天気で、懇親会移動時には大雨でしたが、参加人数は27人(内、学生8人)と前回(6月2日)同様に盛会でした。

懇話会は、主査である諸岡先生からご挨拶をいただいた後、参加者全員が簡単な自己紹介を行い、和気藹々とした雰囲気の中、始められました。

提供していただいた話題は以下の2件です。

1. 「瑞々しい生活環境へのイノベーション」
佐藤春樹先生 (慶應義塾大学)
2. 「人も一個の熱源体である。しかし、…」
諸岡晴美先生 (富山大学)



はじめに、佐藤春樹先生は、流体熱物性応用の視点から副題「水で地球を冷やす」のもとに、地球温暖化の原因は本当に二酸化炭素だけか? そんなにたくさん熱を捨てても大丈夫なのか? 人工的に低温で排熱する技術は可能か? 瑞々しい未来、コ・モビリティ社会の提案という5項目についてさまざまな多くのデータとともにお話いただきました。難しい熱物性の内容にはついていけない私ですが、「排熱は熱量ではなく、むしろいかに環境温度に近づけて捨てるかが重要である」という先生のお言葉に、この夏、一晩中エアコンのお世話になる日の多かった我が家

がいかに地球温暖化に貢献してしまったかと、反省しきりでした。

山田先生、薩本先生を座長として、佐藤先生のご講演に対し、まずは二酸化炭素が本当に地球温暖化の原因になっているのか、という牧野先生の問いかけを始めとして、活発な討論がなされました。今回の懇話会では、討論の時間を十分にとったこともあり、充実した討論が繰り広げられました。



続いてのお話は諸岡晴美先生です。人も自然界では一個の熱源体であるけれども、精巧な自動制御装置を有し、複雑な生理心理反応を示すことを、さまざまなデータに基づいて、わかりやすく説明してくださいました。人を熱源体とだけ捉えるならば、快適環境も式で解けるかもしれないと考えることは可能かもしれない、でも実は一筋縄ではいかないのが人間の難しさ、面白さであることを、改めて教えていただきました。

吉田先生、井上を座長としてなされた討論においては人間の生理や繊維材料に対する質問が相次ぎ、諸岡先生はさまざまな角度から答えておられました。

2つの講演からは、一部だけ切り取って話をすることが多いが、全体を見渡してものを考えることが大切であるという研究姿勢を学んだように思います。

今回参加できなかった方には、次回、学生さんもお誘いの上ぜひご参加下さい。

(井上記)